

---

# ティンクブルー

松山 忠司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ティンクブルー

### 【Nコード】

N1740N

### 【作者名】

松山 忠司

### 【あらすじ】

ある日俺の前に現れたなその男。

男には頭がなかった。

それから増えだした頭のない男達。

奴らに埋め尽くされた家で、俺は変わらず生活している。

\*\*\* A D V I C E \*\*\*

作中には官能表現が含まれますが、それが本分ではありませんので  
R指定は致しません。

## 1・ターコイズ（前書き）

考えるということが物事を戸惑いへと誘う

吸った息を吐き出すのと同じように

## 1・ターコイズ

頭の無い男達が部屋に増え出してからというもの、ほんとツイていない。こいつらが俺の幸せを吸い取っているのか、それとも俺に不幸を運んで来るのか定かではないが、どちらにせよ由々しき問題だ。なにせ俺はこの男達がどうしてここにいるのか、何が目的なのか、まったくもってわからないのだ。

最初の男が現れたのはちょうど3ヶ月前のことだ。その日、俺は課長から半ば無理矢理に残業を押し付けられた。連日のハードワークによる疲れもさることながら、嫌がらせのような書類の山。結局、俺が家にたどり着いたのは夜中の二時をまわってからだった。俺はタクシーの運転手から釣りを受け取ると、礼も言わずにタクシーから降りた。ボタン、という無愛想な音が、眠りに落ちた住宅街の隙間に流れ出す。不機嫌そうな家並みは、その音を無理やり排水溝の奥に追いやって、俺に濃厚な不満の色を示してみせた。ここに住み始めてもう三年目になるというのに、俺はいまだにこの街の機嫌を取るのが苦手だ。無言の重圧に追いやられ、俺はそそくさと玄関のドアを開けた。そこに、頭の無い男が立っていたのだ。突然目の前に現れた異質なそれに、俺は悲鳴をあげた。驚いたからと言い訳するにはあまりにみつともない、滑稽な悲鳴だった。辺り一面の空気を揺らしながら、悲鳴が玄関の中を跳ね回る。俺はその余韻が耳を離れるのを待ってから、恐る恐る頭の無い男の脇をすり抜けた。

妻だ、そう思った。この家には俺と妻しか住んでいない。つまり俺の身に覚えのないことは妻がやっているのだ。靴を脱ぎ捨て、階段を駆け上がりながら、暗い廊下の脇にある寝室のドアを怒りに任せてプチ開ける。ライトスタンドの薄明かりの中、青いツートンカラーのベッドカバーが目飛び込んできた。妻はまた俺に無断で寝室の模様替えをしたらしい。妻とはいってもそのことで喧嘩になる。しかし妻は決まって『ここで寝るだけのあなたにどうこういわれる筋合いはないわ』と言うのだ。俺はその言葉を聞くといつも争う気無くしてしまう。それは妻の言い分が正しいからではない。女という生き物は、いつも少し論点がずれている。そうやってなんだかんだと言い訳しながら、追い詰められると泣き出す。早い話が一人よがりで、他人の意見を受け入れるつもりがないのだ。そういう妻の中にある女らしさが、いつも俺を閉口させる。

俺達は顔を合わせる度に言い争うようになった。大抵は、車の新しい芳香剤が気に入らないだとか、食器をしまう場所がいつもと違うだとか、灰皿のタバコを捨てるだとか、些細な事で。もしかしたら、ただ言い争う理由が欲しいだけなのかもしれない。

最近をよくそう思う。布団の中で妻がもぞもぞと動き出す。俺は怒りに任せて妻を怒鳴りつけた。「一体何なの…？」遠浅を泳ぐような心地良い眠りを遮られた妻は、まばたきをしながらかすれた声を出した。その無防備さにますます腹が立った俺は、パジャマの襟首を掴むと妻をベッドから引きずり出した。妻は俺の突然の暴挙に手足をバタバタと動かして抵抗したが、俺は構わず廊下を抜け階段へと向かう。妻はよろめきながら何とか立ち上がったが、階段の規則的な落差に足をもつれさせ、最後の二段を踏み外して床に倒れこんだ。気にせず妻を玄関マットの上に妻を放り出す。

相変わらず頭の無い男はドアの前に深々と佇んでいた。まるでその空間だけが断絶されたように無機質で、時計の針を凍てつかせるような静寂をまとっている。妻はかなりの間、ゲホゲホと咳き込んでいた。その間俺は、ただ黙って頭の無い男を眺めていた。いや、魅入られていた、と言った方が正しいのだろう。程よく日焼けした浅黒い肌、明らかにスポーツマンと分かる隆々とした筋肉、腰のあたりで履いているダメージジーンズはプレッジだろう。程よく色落ちしたチェックのシャツの下には黒のタンクトップが覗いていた。そして首もとに見える美しいラインの鎖骨。

完璧だった。そう、完璧。

鎖骨から上がないことを除けば。

気がつくとも妻の咳は消えていた。妻の姿も。代わりにリビングからガチャガチャという物音が聞こえていた。リビングに行くべきか？迷ったが、正直俺はもう妻のことなどどうでもよかった。もはやこの異形の者との間に交わされる微弱な会話が、俺の体全体を支配していたのだ。それはチリチリと音をたて指先から血管へと入り込み、鼓動と共に体内を巡っていた。意味の分からない言葉が俺の脳を揺さぶる。まるで知らない宗教の祈祷場に出くわしたみたいに、平衡感覚が失われ全ての細胞はバラバラになり辺りを漂っていた。細胞同士はある程度の間隔を保っていて、たまに近づきすぎるとバシッという音と痺れを伴いながら弾け飛ぶ。それから細胞達はゆっくりと玄関のタイルの上に沈んでいった。タイルのぬくもりを感じながらまどろむ。ふと、意味の分からない言葉の中に聞き慣れた言葉を見つけ出した。

おかえり

確かにそう聞こえた。

聞こえた？ 我に返った俺は元の体に戻っていた。バラバラの細胞ではないし、玄関のタイルに敷き詰められてもいない。少しがっかりした。左肩にタイルの温もりが残っているような気がした。カシャン、という音。振り返る間もなく妻が俺の横をすり抜ける。そして踏みとどまることなく頭のない男の体をまるで幽霊みたいに通り抜けた。俺はこの時はじめて自分の過ちに気がついた。妻には何も見えていなかったのだ。ドアノブに手をかけた妻は一瞬俺を振り返ったが、俺が引き止めようとしないうちに見ると軽蔑の眼差しを残してこの家から出て行った。俺は1人、いや、得体の知れないものと2人、この家に取り残された。妻のシャンプーの甘い香り。それだけが、玄関に柔らかく漂っていた。

それから1人、また1人と頭のない男はこの家に増えていった。1人増える度に俺の身に不幸が降りかかる。それは例えば、駅の階段から転げ落ちて腕を8針縫う怪我をしたり、財布を落したり、妻から判を押した離婚届が届いたり、といった具合に。

不幸が大小様々なら頭のない男達の風貌も様々で、老人から子ども、百間デブから飢え死にしそうな奴まで。そしてどうやら俺以外の人間には見ることも触れることもできないことがわかった。そこには何も存在しないかのように頭のない男達の体を通り抜けてしまふ。男達が現れる場所や日時に関連性は見つけられず、彼等はいつも俺の知らないうちに増えていった。



俺は初めこそ驚いたが、慣れてしまえば生活になんら支障はなかった。少々珍妙なオブジェと思えば、なんてことはない。強いて言うならば最初に現れた位置から少しも動かすことができないことだけが厄介だった。俺はトイレの前やベッドの上に男達が現れないことを祈りつつ、この異様な光景を日に日に受容していった。

## 2・ホリゾン

「夜、空いてる？」

そう声をかけられたのは金曜日の午後だった。外は怠惰を膨らますような空模様で、今にも雨が降り出しそうだった。俺は傘を持って来ていない。降り出したらびしょ濡れになって帰るか、と考えていた矢先だった。俺は窓の外からその女に視線を移す。俺はこの女が好きではない。整った顔立ちに、しなやかな体。見た目は決して悪くないがとにかく嫌味な女だった。何かにつけて小言を言うのだ。仕事ができようとできまいと関係ない。女にはそぐわない高慢さと威圧感で、常に俺を小馬鹿にしていた。それに、つけている香水が大嫌いだ。側にいるだけで胃袋をひっくり返したくなるような不快感。俺はこの女の近くにいた時は、なるべく呼吸をしないように努めなければならなかった。返事をしないかわりにじっと女を見つめる。今までこの女から誘いを受けたことはない。俺がこの女を誘ったこともない。仕事をする以外でこの女と関わりを持ったこともないし、むしろ会社の中で避けていたくらいだ。この女が俺を誘う理由が見当たらなかった。仕事で何かミスをしただろうか？いや、さしあたって思いつくようなミスはなかったはずだし、それならいの一歩に嫌味を言われているだろう。

女は俺の困惑を見透かしたように、笑ってみせた。

「九時に隣のビルの『Blue Rose』で待ってる」

女は踵を返すと、ヒールの音を残しながら行ってしまった。女の香水の香りが、俺の胃袋の片隅をえぐった。

オフィスにはまばらに人が残っているだけだった。

八時三十六分。

ブラインドの隙間から、雨に濡れた窓ガラスが覗く。その水滴ひとつひとつが、各々夜のオフィス街を取り込んで、赤や黄色の小うるさいネオンの色を反射させた。

八時三十七分。

俺が動く度に椅子がキイキイと金切り声をあげる。新しい椅子が欲しい。いつそのこと壊してしまおうか？何もバラバラにする必要はない。キャスターが欠けるか、あるいは背もたれが破れればそれでいいのだ。オフィスに残っているのはあと4人。誰もいなくなつてから実行しよう。月曜日の朝、何食わぬ顔で課長に言えば俺の元に新しい椅子がくる。別に罪悪感なんて必要ない。俺は真面目に仕事をしているし、会社に大きな損傷を与えたこともない。俺は静かな椅子で快適に仕事がしたいし、その方が会社にとっても有益だろう。いわゆる必要悪だ。

八時三十九分。

あと二十一分。『九時に隣のビルの『Blue Rose』で待ってる』あの女、何のつもりだろうか？何か企んでいるのかもしれない。会社から俺を追い出すつもりか？いや、もしかしたら俺に気があったのかもしれない。俺のことが好きで、ただあの高慢さや、育ちのいい女がときおりちらつかせるくだらないプライドがあの女にああいった態度をとらせるのかもしれない。

八時四十分。

いや、希望的観測から物事をみるのは俺の悪い癖だ。俺が結婚しているのは皆知っていることだし、第一あの女にも婚約者がいると聞いたことがある。そういえばやたら高そうな指輪をしていた。あの女はきつと何か企んでいる。

あの 女 は 何か 企んで いる。

一体何を？そんなこと俺にわかるはずがない。関係もないし、知る必要もない。俺はあの女と関係ない。

俺 は あの 女 と 関係 ない

八時四十二分。

行ってもきつと良くないことが起きる。今日は新しい男を見つけたか？いや、見つけなかった。今朝は増えていなかった。でももしかしたら増えているのかもしれない。クローゼットの奥だとか、ベッドの下だとか。そうだ、俺はあいつらが来てからついていないんだ。行かない。だから行かない。きつと良くないことが起きる。

八時四十四分。

あと十六分。

俺がブルーのライトに照らされたのは九時を三十分もまわってしまっただった。看板には青いバラとBlue Roseの文字が茨で囲まれたロゴマークが描かれている。俺は重いドアに規則正し

く並んだ四角いへこみの縁を目でなぞりながら、ゆつくりと呼吸を整えた。酔ってしまえばあの香水も平気だろう。腰の辺りで汗ばんだ手のひらを拭い、ぐっとドアノブを押した。

まるで空間を切り落としたかのように、店内には軽やかなテンポのジャズが流れていた。鮮やかなブルーの照明。それは海の中と言うよりは、空の先端と表現した方がしっくりきた。俺は肩の力を抜いた。大丈夫、この場所は俺を拒絶してはない。

女は二人掛けのテーブルに、こちらに背を向けて腰掛けていた。それが分かったのも他にいた二人の客が男だったからだ。女は濃い藍色のジーンズに艶やかなピンク色のホルダーネックを着ていた。広く開いた背中から、真っ直ぐな背筋が妖しく照らし出されていた。ゆつたりとした雰囲気になぞらえるように、バーテンダーがいらっしやいませと言った。それに気付いた女は、振り返って俺を見つけると、軽やかに微笑みながら手招きをした。

「ずい分仕事熱心なのね」

女は腰掛けようとした俺にそう言った。それはいつもの嫌味っぽいテレビの砂嵐のようなザラザラした口調ではなく、上品な女性だけが持ち合わせたキウイのように潤った言葉だった。いつもこんな風ならどんな男も放っておかないだろう。

俺はブッカーズをオン・ザ・ロックで注文した。

「来ないのかと思った」

女は少女のような切なさを露わにしたが、恥ずかしさをこまかすようにカクテルを一気に飲み干した。白乳色のカクテルがまるで意志

を持っているかのよう、淡いピンク色の唇の隙間に流れ込む。

「同じの貰える？」

バーテンダーは返事をせずに、新しいカクテルグラスに手を伸ばした。

女との間に沈黙が割り込む。それは気まずいものではなかった。俺も女も同じように、沈黙を見つめ、ただ待っていた。沈黙もただ、俺と女の顔を交互に眺めては、大人しく時間が過ぎるのを待っていた。俺は沈黙を破るべきかどうか迷ったが、女が子犬とじやれるように沈黙をいとおしんでいる気がして言葉を飲み込んだ。いつもと髪型が違うせいだろうか。指先で沈黙を転がす女に、ふっと好意が湧く。薄明かりの中で長いまつげが女の頬に影を落としている。そのひどく刹那的なコントラストに、俺は動揺していた。セピア色のヌード写真を見ているような、そんな気持ちだった。耳の裏側に心臓を貼り付けたように、鼓動が世界の中を駆け抜けていく。

気がつくとバーテンダーが後ろに立っていた。無言で酒をテーブルに置いて去っていく。『お待たせしました』とも『どうぞ』とも言わない。愛想よく笑うことすらしない。こういった所作は、彼の店づくりの一環なのだろうと思った。彼が提供したいのは馴れ合いや慰め合いの場ではなく、酒に酔いながらこの空間に溶けてしまうような安堵感なのだ。そのために彼は自分の気配すら消してしまっている。きつと一歩店の外に出れば、美味しい酒を呑んだことは覚えていても彼のことは誰も思い出さないだろう。

グラスを手に取り乾杯するべきか迷ったが、そのままグイと酒を流し込んだ。慣れない刺激に舌が悲鳴を上げる。女はまだ、沈黙を指

先で転がしながら楽しんでた。普段とは違う女の妙な少女らしさが俺の酒のペースを早めた。

「見えるんでしょ？」

テーブルの端から、沈黙が転がり落ちた。女は沈黙を追わずに、カクテルグラスに視線を戻すとゆっくりと白乳色の酒を口に運ぶ。俺は言葉に詰まった。

ミエルンデシヨ

脳が女の言葉を反復させる。

ミエルンデシヨミエルンデシヨミエルンデシヨ

左右の壁にぶつかりながら跳ね返る女の言葉は、5往復ほどでやつとビー玉くらいの大きさになった。拾い上げて噛まずに飲み込む。喉を過ぎたそれは、いくばくかの熱を伴って俺の内蔵をギタギタに裂いていく。裂け目から垂れだしたブツカーズが体全体に痛みを伝達していた。

女は俺の答えなど、どうでもいいようだった。俺の反応を確かめようとしてもしない。何が？そう聞き返す前に女の堅い瞳に捕らえられた。

「頭無しの男」

思わず肩を揺らす。

「見せてほしいの。だから今日、あなたを誘った」

まばたきをしない女の瞳が、一瞬で絡みついた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1740n/>

---

ティンクブルー

2010年10月15日22時57分発行